

大阪は「まち」がほんまにおもしろい

ものいわじ世がために身を捧げた人々

～中島にまつわる悲話の数々～

長柄人柱となった巖氏(いわうじ)、百姓普請による大水道工事である中島大水道など、世のため人のために自らが犠牲となった人々にスポットを当てました。崇禅寺に至るまで、涙流さずにはられない、大阪の先人たちの偉業に触れるまち歩きです。



1 蒲田神社
室町時代の創建で、御祭神は宇賀御魂大神と別雷大神です。蒲田神社は、かつては室の社と呼ばれていましたが、明治42年(1909)に当時の地名である大阪府西成郡中島村大字蒲田の字名を取って蒲田神社に改名しました。現存する境内の古木には蒲田千年楠を始め数株があり、かつて数十株の大樹が繁茂していた頃の名残をとどめています。

2 大願寺
自ら進んで長柄の人柱となった巖氏(いわうじ)の功績は朝廷にまで伝えられ、推古天皇の勅命により、巖氏の冥福と長柄橋の守護を目的とする大願寺が建立されました。宝永6年(1709)に、両替商の天王寺屋彌右衛門が再興しました。

3 長柄人柱 巖氏碑
長柄橋の架橋は、度重なる失敗を繰り返す非常な難工事でした。垂水の長者・巖氏(いわうじ)は、横継ぎを当てた袴を履いていながら、「袴に横継ぎを当てている者を人柱にすればよい」と進言し、橋がないことに苦しむ人々のため、自らが人柱になることを申し出ました。巖氏は、人柱となる日、娘の照日らに別れを告げ、石櫃に入り、生きながら橋柱の下深く埋められました。巖氏が人柱となるや、橋は難なく架設され、大水が出ても流されることがなくなりました。推古天皇の治世613年のことです。父の死後、悲しみのあまり、物言えなくなった巖氏の娘・照日は心まで閉ざしてしまい、ついに嫁ぎ先から里方に帰されることとなりました。長柄橋を渡って垂水まで来た際、一羽のキジが鳴き、夫が弓で射止めました。奥の中から見ていた照日は「ものいわじ 父は長柄の橋柱 鳴かずばキジも 射られざらまじ」と詠じ、泣き入ったと伝えられています。その後、夫婦は仲良く暮らしました。長柄人柱巖氏碑から地図上でほぼ真北の方角に垂水神社があります。垂水神社付近はかつて雉子騒と呼ばれ、現在も雉子鳴き道という通りに碑が残されています。

4 須賀神社跡
西淡路は、昭和33年(1958)まで国次町という地名でしたが、これは刀工・来国次から取ったものです。来一族が南北朝の戦乱を避けて京から淡路に移り住んだ際、一族の鎮守として創建されたのが須賀神社です。須賀神社は、明治43年(1910)に中島惣社に合祀されました。大阪府天然記念物に指定された樹齢600年と言われる大楠が残っています。

5 中島大水道顕彰碑
北中島22カ村の庄屋や村民が、度重なる水害と水はけの悪さに耐えかね、延宝2～4年(1674～1676)にかけて何度も江戸幕府に対して公儀普請による水路開削を請願しましたが、幕府は多額の工事費出費を嫌がり、百姓普請を前提に水道開削を許可しました。庄屋たちは22カ村の村民を説得して資金2千両を募り、延宝6年(1678)の春にわずか50日間で伝法・申新田に至る9.5キロメートルの大用水路を貫通させました。この中島大水道は、淀川改修期の明治32年(1899)まで220余年の間、その機能を果たし続けました。東淀川区役所には中島大水道の古絵図と復元模型が展示されており、当時の水路を知ることができます。

6 永春寺
来一族の居住地があった場所で、境内には来一族の石廟と、一族が使用した空井戸が残っています。また、淡路で7年程暮した上田秋成寄贈の石燈籠があることでも有名です。

7 中島惣社
白雉2年(651)に五穀豊饒を祈って創建されたと伝えられます。中島郷48カ村の親宮で惣社と言われ、明治末年には19,000坪余りの境内を持っていました。境内に残る芭蕉句碑は、芭蕉顕彰に生涯を尽くした俳人・不二庵二柳の弟子、三四坊扇書が文化10年(1813)に建立しました。中島惣社の北側を流れていた中島大水道の一部が落ち葉川とも呼ばれていたことから、「宮人よわが名を散らせ 落ち葉川」の句碑を選んだと伝えられています。

8 崇禅寺
天平年間(729～749)に法相宗の行基により創建されました。1441年の嘉吉の乱で播磨守護・赤松満祐によって殺害された室町幕府六代将軍・足利義教の首が寺に葬られ、翌1442年に時の管領・細川持賢が大伽藍と寺領を寄進し、足利義教ならびに細川家の菩提寺として再興されました。その折、特叟亨隣大和尚を開山とする曹洞宗に改められました。足利義教の首塚とともに、特叟亨隣大和尚、細川玉子(ガラシャ夫人)の墓が並んでいます。

9 遠城兄弟の墓
正徳5年(1715)11月4日、大和郡山の藩士・遠城治左衛門と安藤喜八郎兄弟は、末弟の宗左衛門が剣術の試合で負かした生田伝八郎に闘討ちに遭って殺されてしまった仇を討とうとしましたが、反対に伝八郎の多勢の門弟によって、崇禅寺境内で返り討ちに遭いました。当時の住職十四世門啓天岑和尚と、元江戸町方与力の勝見宗春が崇禅寺内に墓碑を建立し、兄弟を弔いました。

